

令和元年6月21日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02615

研究課題名(和文) 動詞から派生される-able形容詞に関する史的研究

研究課題名(英文) A Historical Study of Deverbal Adjectives with -able

研究代表者

児馬 修 (Koma, Osamu)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：10110595

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代英語の -ableは、多くの他動詞から形容詞を形成する派生接辞であるが、歴史的には英語本来の接辞ではなく、13世紀頃に古フランス語から借入されたものである。その接辞が英語本来の派生接辞(eg, -ing, -nessなど)と同様に「生産的な」接辞として発達する過程を検証した。具体的には、直接借入された外来語(eg, edible, legible)に基づいて、英語本来の他動詞に-ableを付ける過程(eg, eatable, readable)、さらには、動詞句(eg, apply to X)全体に-ableを付ける過程(eg, applicable to X)等を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語史においては外国語の影響で、二つのシステムが併存している例(屈折(-er, -est)による比較・最上級と分析的なシステム(more/most ...)の併存)や、既存の構文に外来語の動詞が適合されない例(二重目的語構文に外来語のdonate, contributeが使えない現象)、など、母語の文法システムに取り込む際のさまざまな特異性が知られている。したがって、本研究の成果は、外国語のシステムを母語のシステムに取り込む際に起こるメカニズムの問題解明にもつながる可能性を十分に秘めた研究である。

研究成果の概要(英文)：One of the most productive derivational suffixes in Present-day English, -able, which was borrowed from Old French in the period of Middle English, has acquired its high productivity in the course of the history of English. The present research is concerned with Anglicization of this loan suffix, namely, with when and how the suffix was integrated into the grammar of English. One of the convincing diagnostics for the Anglicization is the emergence of the so-called Hybrid (a native base + -able (e.g. believable)). However, I have argued that there are many other idiosyncratic properties of -able to be taken into account when one considers the issue of this productivity. Moreover, I have shown that the derivational suffix in Late ME had already developed to the extent that it served as a seemingly inflectional suffix attached to verb phrase (e.g. applicable to X).

研究分野：歴史言語学

キーワード：派生接辞 外来接辞 混種語 英語化 ロマンズ接辞 ゲルマン接辞 頂の継承 -able

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代英語における -able の基本的な特徴については OED, Jespersen (1942), Marchand (1969), 竝木(1990) などでもかなり解明されてきているが、そのロマンス接辞の歴史的発達の詳細については、以下(1)-(2)に示す二つの意味で、必ずしも十分に解明されているとは言えない。

(1) Hybrid の事実調査

まず、ロマンス語由来のこの接辞が ME 期に借入され、英語本来のゲルマン語基に -able が付く事象(例えば、believable) いわゆる Hybrid が出現したことについては上記の基本文献で言及されているものの、それがいつ頃、どのように出現・発達したかについては、実証的に明らかにされていない。中英語期から初期近代英語期にかけて、さらなる事実調査が必要であることは明白である。

(2) -able の生産性(productivity)に関する視点の欠如-----上記 Hybrid の発達に関する研究は -able の生産性、並びにロマンス接辞の「英語化」という視点から、極めて妥当な着眼であることは確かであるが、他にも目を向けなければいけない多くの視点がある。それは -able 語の音韻・形態・統語・意味などに関する視点である。下記の文法の広領域で、-able が示す特異性について明らかにせねばならない。

i) 音韻的視点 -----Aronoff (1974) は 2 種類の -able、すなわち、接辞には基体の第一強勢の位置を変える接辞(第 I 類)とその位置を変えない接辞(第 II 類)とがあり、-able が第 I 類の接辞であると同時に、第 II 類の接辞でもあると主張している。この II 類の -able の出現は、-able が、他の英語本来の II 類接辞(-er, -ing, -ness, -ful, un-) と同様の特徴を新たに獲得したことを示唆しており、いわば -able の「英語化」の証拠の一つと考えられる。英語がこの II 類の -able をいつごろ獲得したかについて探ることが課題となる。

(ii) 音韻・形態的視点-----近代英語期において、ラテン語源の -ate で終わる動詞から派生される -able 語の変化で、例えば、切除(truncation)を含んだ demonstrable, educable から、形態・音韻的に「透明な」形 demonstratable, educatable のように推移する現象が観察される。この変化は Kastovsky (2006) で指摘している、いわゆる stem-based >word-based へのタイポロジーの変化の一つであるともいえ、この推移が近代英語期のいつごろ発達したのかについても歴史的に興味深い課題の一つとなる。

(iii) 統語的視点 -----現代英語で -able(-ible) 派生形容詞が名詞を後置修飾することがあるといわれている。この後置修飾の歴史に関しては、中尾 (1972:398) に、中英語でフランス語の模倣によると考えられる後置修飾構造の例が起こると指摘されている程度で、詳細はまったく解明されていない。この点に関するさらなる中英語の事実観察が課題となる。

さらに、現代英語で生産性の高い派生接辞、たとえば、-ing, -er, -ness を含む派生語は語基の動詞の頂構造が継承されることがある。この事実は -able 語に関しても同様で次のように PP の継承や、Agent を表す by 句との共起がみられる(竝木 (1990:343))。

a) This marker will be applicable to an animate actor such as "John," ...

b) Mary is trustable by a ten-year-old.

上記の項の継承や Agent との共起が歴史的にどのような発達をしたのかについては、ほとんど先行研究がなく、この事象が -able 派生の「英語化(生産性)」の出現を示す証拠の一つとなるのであれば、その歴史的解明は意義深い。

(iv) 統語・意味的視点-----上記の後置修飾と前置修飾の -able にそれぞれ微妙な意味の違いがあると指摘されている(Quirk et al. 1985:419)。現代英語の後置修飾と前置修飾にそれぞれ temporal/permanent の意味の違いがあるとすると、その事実は歴史的にどのように確立されたのであろうか。また -able 派生語がその事実にどの程度関与したのであろうか。Cinque (2010) はタイポロジーの視点から、ゲルマン語系は前置修飾が多義で、後置修飾は概して temporal の意味であるのに対し、ロマンス語系は、正反対に、前置修飾が permanent のみの解釈で、後置修飾は多義であると指摘している。このように類型論的に異なる英語と仏語が接触した際に何が起こったのか、これらの問題も解明に値する課題である。

(v) 意味的視点 -----自由形態素の able が派生接辞の -able と語源的に全く異なることは歴史研究者を除いて、意外と知られていない。ただ、-able 派生語の意味が「~される」という意味に発達する過程で、自由形態素 able (これ自体も OF 借入語) の意味が関与していることは OED などでも記述されているが、その詳細は解明されていない。特に、中英語における able には「扱いやすい」「~できる」「~にふさわしい」など様々な意味があり、be able to などの表現が able の借入と同時にあったわけではない。そこで、able の意味の変遷の詳細と、それが -able 語の発達にいかなる影響を与えたのかについても解明せねばならない。

2. 研究の目的

本研究の目的は現代英語における形容詞派生の接辞である -able の歴史的発達を解明することにある。-able は現代英語において「他動詞に付いて、形容詞を新たに造れる、新造力(生産性)の強い派生接辞」であるという捉え方がなされているが、中英語期以降において、そのような特徴がいつごろ、どのように獲得されたのかを明らかにする。また、この -able は、そ

の起源がロマンス接辞であるがゆえに、英語の文法に取り込まれた際に、音韻・形態・統語・意味の面で、多様な特異性があらわれることになるが、その特異性の詳細についても解明する。

3. 研究の方法

本研究では以下の**研究項目**を設定している。

(1) 中英語期・初期近代英語期における-able 派生語の生産性の高まり(英語化)の時期を、主として hybrid の出現という視点から探る。(2) 統語・意味的な視点から-able 語の特異性---able 語の前置・後置修飾に対応する意味の相違---を調査する。(3) 統語的な視点から-able 語の特異性--- -able 語における項の継承や、行為者を表わす by-句との共起---を調査する。(4) ME期の自由形態素 able の意味の変遷と-able派生語の発達との相関関係を探る。(5)音韻的視点から-able 語の特異性---II類の -able の出現時期---を探る。(6)音韻・形態的視点から-able 語の特異性---切除を伴わない「より透明な」用例(例:educatable)の出現---を探る。

4. 研究成果

上記研究項目の(1)については、中英語のいくつかのテキストの精査によって、あらたに英語本来語の動詞に-able をつけた派生形容詞(いわゆる Hybrid)を数十例検出できた(児馬2018)。特に15世紀の神学者 Reginald Pecock の作品などにHybridの顕著な使用が見られた。また、hybridの多くが、すでにOFから借入されている-able語の同義語として形成されていることが観察された(例えば、edibleからeatable, legibleからreadableのように)。

項目(2)については、後置修飾の散発的な用例は収集できたが、前置修飾との比較ができるほどの十分なデータが採取できていない。

項目(3)については、-able語における項の継承に関して、特に15世紀に興味深い事例が収集できた。興味深いことに、動詞の下位範疇化枠の一部が継承されている事例(e.g., He is letttable from heaven ... (ME letten (=prevent); ... other things knowable to be outward witts (綴りは現代綴りに改めている))が比較的、数多く見つかった点である。

項目(4)については中英語における自由形態素 able の意味、統語特性、形態特性(比較・最上級の形態(迂言型 (more ...: most ...)・屈折型 (-er, -est))等に関して、MEDの引用例をデータとして用いて調査を行った。そこで、ableの異綴りが20近くあることが確認された。この点は今後のコーパスに基づく研究などで、検索法に活用できる発見である。なお、行為者を表わす by-句との共起については、用例を十分に収集することはできなかった。

ableの比較・最上級の調査については、迂言形が比較的頻繁に用いられていたことがわかった。屈折型よりも、むしろ迂言形に比較的多く表れていたというこの事実は、ME期全体を通じて屈折型が一般に多かったことを考えると(中尾 1972:233)単音節の-ableがまだ外国語として意識されていたことを示唆しており、その点が興味深い。

また、able形容詞の転換、つまり動詞としてもかなり使用されていたことが確認できた。16世紀にenableが派生語として現れる前段階で、このような転換が起こっていたことは興味深い。以上の事実調査は、言語事実として、ある程度把握できたといえるが、-able派生との関連については分析・考察には至っていない。

項目(5)(6)については音韻情報の手掛かりを入手することが困難であること、また、「透明性」の高いeducatableのような用例が今回の中英語の調査では見つけられなかった。初期近代英語期に関する調査が待たれる。

(なお、研究成果の全貌は小冊子『研究成果報告書』(2019年、pp. 1-61)に収録した。)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

児馬修「派生接辞の生産性 -- -ableの歴史」『立正大学文学部論叢』第138号
2015年 57-83.

児馬修「後期中英語における -able の生産性」『立正大学大学院文学研究科紀要』
第34号 2018年 13-25.

〔学会発表〕(計 2件)

児馬修「外来接辞の母語化 -ableの場合」津田塾大学言語文化研究所「英語の通時的および共時的研究会」2016年

児馬修“Naturalization of -able and Its Idiosyncrasies”大塚英語教育研究会
2016年

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

- 児馬修 “Anglicization of *-able* and Its Idiosyncrasies” 招待講義 北京大学外国語学院 文史楼 王繼輝教授 2016年
- 児馬修 “Anglicization of *-able* and Its Idiosyncrasies” 招待講演 对外貿易経済大学 (University of International Business and Economics (UIBE))
2016年
- 児馬修 科学研究費補助金 基盤研究(C) 一般 研究成果報告書
『動詞から派生される *-able* 形容詞に関する史的研究』 2019年 1-61.

6. 研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者：なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。